便教会新聞

第185号

令和5年8月

『大人（たいじん）の生き方』

日本を美しくする会
相談役　鍵山秀三郎

この国を良くするには、政治家の人は政治の上で、行政の方は行政の上で、教育に携わる方の教育の上で、それぞれの分野でそれぞれの良くする仕方があるわけです。私は商売をしておりますので物を売るのが仕事でございますけれども、ただ物を売って自分の懐だけ増えていればいい、ということでは人間として生きてる甲斐がないんです。もちろんで商売ですから、売り上げを上げて利益を上げることも大事なことでございますけれども、自分の大事な時間、大事なお金を使ってですね、世の中を良くするということに努めていくことがとても大切（たいせつ）でございます。中国では昔から「大人（たいじん）、小人（しょうじん）」という言い方が使われておりまして、「あの人は大人だ…、あの人は小人だ…」とよく言われるんです。意味はいろいろありまして、地位、肩書きの高い人を大人という場合もあります。しかし、今日、私が申し上げる『大人』というのは、そういう意味ではなく、「たとえ地位、肩書きが高く、有名な人であっても小人はいくらでもある。何の肩書きも、何もないけども大人もいるんですね。」どういうところで、『大人、小人』と言えるかといいますと、『大人』というのは、自分の持てる大事な物、お金も時間も含めて自分のとって大事な物を、人のため、国家社会のために使える人、そういう人を『大人』と言うんです。自分の物をすべて自分のことにしか使わない、すべて全部自分の楽しみや生きることだけに使ってしまう人は、私は『小人』であると思うんです。そういう意味で、「大人、小人」と分けてまいりますと、誰でも『大人』になろうとすればできるわけですし、また、一方では相当な力を持ちながら、一生を『小人』で終わってしまうという方も少なくはないんです。できれば、人間は長生きになったといっても百年が限度でございまして、誰もが「金さん、銀さん」みたいになれるわけではございません。限られた人生で、細い糸のような生き方をするか、幅の広い、厚みのある人生を送るか、それによってその人の価値は大きく変わってくるんです。人間の寿命が伸びたといってもこれから先、二倍に伸びることはありません。しかし、幅は無限に広げることができるんですね。長さはこれ以上長くすることできないと思いますね。幅はその人の努力次第で広げることができるんですね。年齢とともに広げていくと面積はどんどん広がりますね。さらに、ここに厚みが加わると、その人の生きていく人生の価値は、とても大きなものになると思うんです。難しいことをしようとか、あるいは自分の能力を超えて無理なことをしようということではありません。「自分の今持てる力を使うだけで十分にできる」と思うんです。

大人虎変（たいじんこへん）とは
優れた人物が、時の流れに合わせて日に日に自己変革すること。または、統治者の制度変革によって、古い制度が新しくてより良い制度に改められること。「大人」は徳があって立派な人。「虎変」は虎の毛が美しく立派に生え変わることから、変化や改革の喩え。

【編集後記】黒坂昭弘先生、大舘慶徳先生、お二人の先生それぞれが抱える問題、悩みに違いはあるにせよ、それらが種、きっかけとなり掃除道に出合いました。直ぐに解決策が見つからず、あきらめることなく暗中模索、試行錯誤するなかで掃除道（トイレ掃除）の入り口に立ちました。その扉に手をかけて中に入るには、ためらいもあり、勇気の要ることだったと思います。中に入らない選択肢もあったはずですが、サムシンググレートに押されての一歩となりました。二歩、三歩と進む中、解決策を見つけようとする外向きの矢印が内側、自分の内面に向き、一番わかっているようで全く気づかなかった自分というものに向き合ってみると、見ようとしなかった、隠していたダークな自分を知ることになります。過去を変えることはできませんが、掃除道での気づきを行動に活かしていくリスタートとなります。長く苦しんだトンネルの先に小さな光、出口が見えて安堵しますが、そこですべてが終わるわけではないんです。ひとつの終わりですが、次の始まりでもあります。言い換えるとトンネルは「人としてどう生きるのか」を試しています。大舘慶徳先生の文の中に「使っている教室が汚くても気にしなければ気になりませんでしたが、掃除を継続していくとゴミに気づけたり、汚れているところを見つける自分に気がつきました。また、掃除をしないと落ち着かない、すっきりしないと感じるようになった。」とあります。日々、私たちは試されていると思います。私自身、西尾を美しくする会、便教会活動をする度にリスタートしています。高野修滋　拝

『ご縁が道を切り拓く』

石川県立七尾高等学校
教頭　黒坂　昭弘

鍵山秀三郎相談役との出逢い

小・中の教員を経て、平成十四年四月に、母校石川県立七尾高等学校に赴任しました。男子バスケットボール部の監督を務め、素晴らしい力を持った生徒たちとともに優勝を目指し大会に挑みましたが、あと一歩のところで優勝を逃す悔しい試合が続きました。指導者として大変未熟であることを痛感し、自分自身の人間力を高めなければいけないと悩み続けていた頃、金沢市で鍵山相談役のご講演とトイレ掃除の案内を見つけ、勇気を振り絞って参加の申し込みをしました。その時、体内からアドレナリンが湧き出す感覚は、今でもはっきりと覚えています。期待と不安が交錯しながら、平成十六年八月二十八日（土）、二十九日（日）一泊二日で、生徒たちと一緒に講演会とトイレ掃除に参加しました。七尾から約一時間半かけて電車で金沢へ向かい、金沢駅で夕食を済ませ、バスで会場の金沢市文化ホールへ移動しました。鍵山相談役の優しくも力強いお話を拝聴し、熱い涙が流れてきたと同時に、「絶対この生徒たちと優勝する」とマグマのようなエネルギーが漲ってきました。講演会後、宿泊先に移動しようとすると、関係者の方が駆け寄って来て「このあと隣のホテルで鍵山相談役の歓迎レセプションがあります。鍵山相談役が、もしご都合がよろしければ先生と生徒たちも一緒に参加しませんかとおっしゃっています。」と、身に余るお誘いを受けました。私たちには場違いであると思い、「夕食は駅で済ませてきましたので…」と丁重にお断りさせていただきましたが、再度、ご丁寧なお誘いをいただき、ご厚意に深く感謝するとともに、講演会後の興奮が私の背中を押し、歓迎レセプションに参加させていただくことにしました。鍵山相談役のそばで教育論から人生論にいたるまで多くの熱いお話を拝聴し、「教育者としてどう生きていくのか。」「どのような生徒を育てていくのか。」確固たる信念が構築された**生涯忘れることができない日**となりました。なお、生徒たちは夕食を済ませたはずでしたが、さすがは食べ盛りの高校生。次から次へもてなされる料理を堪能していましたが、私は緊張で食べ物が喉を通らず、ひたすらお茶を飲んでいました。

悲願達成

翌日、生徒たちと一緒にトイレ掃除に参加し、掃除後の体験発表会では、多くの生徒が班の代表として積極的に前に出て「この経験を活かし必ず大会で優勝します。」「仲間への感謝、親への感謝を忘れず日々精進します。」「これからは眼に見えないところに気づく人間になりたいです。」など、この二日間で生徒たちが大きく成長した姿に大変感動しました。その後、定期的に学校で生徒たちとトイレ掃除を実践し、5か月後の新人大会で優勝を勝ち取ることができました。この実践をさらに広めたいという思いから、近隣のいくつかの中学校のバスケットボール部の指導者に働きかけたところ、快く賛同していただき、高校生と中学生、指導者が一緒になってトイレ掃除を実践する輪が広がっていきました。不思議な縁、力を感じるのは、初めて高校生と中学生の合同トイレ掃除を開催した時に参加した中学生たちが勉学に励み、進学校である本校に多く入学してきました。その生徒たちが高校で勉学とバスケットボール、そして心磨きに励み、高校3年生になった平成二十年六月、全国高等学校総合体育大会石川県予選で二十二年ぶりに優勝を果たし、悲願のインターハイ出場を果たしました。さらに、その年の十二月、全国高等学校選抜優勝大会（ウィンターカップ）にも出場を果たしました。

鍵山イズム

二つの全国大会出場を記念して製作した部旗の一つに「徹底」、もう一つに「感謝」の文字が大きく刻まれています。目標の全国大会出場を

便教会は、教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会HP

便教会新聞発行責任者　高野修滋
〒四四五－〇八〇二
愛知県西尾市米津町天竺桂二七
携帯　090 - 4215 - 1727

目指し、何千回、何万回生徒たちと確かめ合ってきた言葉であり、言うまでもなく、鍵山相談役のトイレ掃除道から学んだ言葉です。二十二年ぶりに歴史の扉をこじ開けたその時のエースである安井英司主将が、現在、私の後継者として本校男子バスケットボール部の監督を務めています。彼は「霜に打たれた柿の味　辛苦に耐えた人の味」を座右の銘とし、日々情熱を持って指導にあたっています。鍵山イズムは脈々と継承されています。

ご縁に感謝

平成十四年度から十三年間母校にお世話になり、その後八年間行政の方で仕事をさせていただき、今年四月に再び母校に携わる機会を与えていただきました。しばらく、学校現場からご無沙汰していたにもかかわらず、今回の第二十六回便教会総会瑞龍寺お掃除大会にお声かけいただき感謝の念に堪えません。以前から大変お世話になっている市村様、森川様、東井様をはじめ、おやべ掃除に学ぶ会の皆様、今回初めてお逢いした方々から、多くのことを勉強させていただき、改めて、人とのご縁の大切さ、素晴らしさ、ありがたさに胸が熱くなりました。また、高野修滋先生には基本から丁寧にご指導をいただき、初めてトイレ掃除に参加した**あの時の忘れられないあつい夏**の感動が蘇ってきました。さらに、本校バスケットボール部が長年目標としていた相手チームの監督さん（金沢高校大舘慶徳先生）も参加しており、魂と魂をぶつけ合い本気で戦い合った時を経て、一緒にトイレ掃除を行えたことに大変感謝しています。加えて、以前私が七尾高校に勤務していた頃の同僚にも再会し、今回の数々のドラマチックなご縁は、トイレの神様烏枢沙摩明王様のお力であろうと感じています。

道

これから、教え子の安井監督と協力して、まずは男子バスケットボール部から地道にトイレ掃除を再開したいと考えています。そして、困難に出会っても心折れず、勇気とエナジーで一歩を踏み出し、人とのご縁に感謝の念を持って、自分の道をたくましく切り拓いていく生徒を育成していきたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

『教師・指導者の自覚』

金沢高等学校
バスケットボール部顧問
教諭　大舘慶徳

便教会には「トイレ掃除を学ぶ」のではなく「トイレ掃除から学ぶ」という素晴らしい言葉があります。以前、「業績が伸びない会社の駐車場はゴミが落ちている」「問題の多いクラスは教室のドアの溝が汚い」と教えていただきました。初めて受け持ったクラスが問題だらけで悩んだことがありました。学校長からは、「担任失格」とまで言われました。どん底の状態の中で掃除の大切さについて学ぶ機会をいただきました。半信半疑の気持ちもありましたが、とにかく実践することにしました。生徒が登校していない教室に一人でバケツと雑巾を持って水拭きを始めました。ドアレールの溝をきれいにして、黒板のチョークの粉をふき取り、黒板下が白くなっていたので身を低くしてふき取りました。それから後ろのロッカーの隅をきれいにして、机の整理整頓など教室環境を整えました。その時間は十分から二十分程度です。いつもより少し早めに通勤しなければいけませんが、「問題のないクラス」にするために藁にもすがる思いでした。掃除をしたからすぐに結果が出るほどクラス経営は簡単なものではありません。清掃を始めてからも問題がなくなることはありませんでした。掃除しているときに他人の目や声が気になったりしましたが、やらなければならないと自分に言い聞かせて取り組んでいました。掃除はやらなくたって誰にも何も言われません。使っている教室が汚くても気にしなければ気になりません。私が掃除を始める前はこのような心境でした。掃除を継続していくとゴミに気づけたり、汚れているところを見つけられたりできる自分がいることに気がつきました。また、掃除をしないと「何か落ち着かない。」「心がすっきりしない。」といった感じがするようにもなってきました。**クラスの問題を改善するための掃除が、自分自身に矢印を向けるきっかけを与えてくれて、自分の心を見つめることにつながっていました。**その取り組みが、自分の中に深く浸透していくときの影響力、主体変容に驚きました。自らの体験を通じてそれらのことが、身に刻まれることになりました。

私は「誰でもできることを誰もができないくらいにやり続ける。」という言葉にで出合いました。この言葉は掃除の持つ意義をしっかりと伝えていると思います。掃除を始める動機は人それぞれです。最初は私のように半信半疑かもしれない。しかし、掃除を継続したその先の自分がどのように変化するのか？誰にもわからない。貫いた者だけがたどり着く境地があります。頭で考える前に動くことです。実践してみて、継続して、掃除を通じて自分と向き合うことが大切だと思います。便教会の取り組みは、私の心を深掘りする機会でした。「暗い、寒い、汚い、臭い…。」トイレ掃除をしない理由をいくらでもあげることができます。「汚れているところに手を突っ込んできれいにする。」ただこれだけのことなのにあれこれ理由をつけて言い訳をしてやらない。挙句の果てには、誰かがやってくれるだろうと思ってしまっている。そんな自分の枠からの脱却が「ただ身を低くして実践あるのみ」なのです。そして、**答えは自分の心の中にあるのです。**最初の参加は昨年十二月でした。寒い朝でしたが、部活動でも結果が出ていた時で、心を弾ませながら取り組めたことを思い出します。暗い中、頭に懐中電灯を付けながら和式便器に手を突っ込んでいきます。最初、ザラザラ感やヌルヌル感を指先に感じますが、磨いていくとつるつるになっていきます。その様子は取り組んでいる者にしかわかりません。磨く前と磨いた後では指先の感じが全然違うのです。僅かなことですがとても充実感があります。また、見えるところばかりではなく、見えないところは、身をさらに低くしてタイルすれすれまで視線を下げて便器をのぞき込んで見て、指先で感じます。二回目に参加したのは、今夏六月で快晴の気持ちのいい朝でした。しかし、参加するまでに職場や部活動でいろいろなことがあり、心が沈んでいる状態での参加でした。部活動の大会期間中でもあり負けたら参加できるという条件となり、どうするのかぎりぎりまで悩んでいました。前回と今回の違いは、心ひとつの置き所が違うだけでした。これだけのことなのに自分自身に大きな影響を与えていることを再確認できました。日頃は生徒に「心を大切にしっかりやれ。」と言っているのに自分は大したことないなと感じながら第26回便教会総会の参加となりました。今回は、高野先生から改めてトイレ掃除の手順や意義、さらには、生徒にかける言葉のタイミングなどご教示いただきました。方法論や成功への道などという言葉が脚光を浴びていますが、**本当に大切なことは足元にありますし、見えないところにあるのだ**と高野先生から教えていただきました。さらには、参加されている方々は、毎回明るく元気で、誰よりも動いていて、一緒に掃除をしているだけでエネルギーをもらえます。**いわゆるパワースポットのような存在です。**今回参加させていただいて私も一緒にいて勇気や元気を与えられるパワースポットのような存在でありたいと思いました。そのためには、人格を養うこと。人格を養うには、目には見えない心を感じながら、形あるものをしっかりと磨くしかありません。トイレ掃除を通じて自分自身がどのような人物に変容していけるのかを楽しみながら取り組んでいきます。おかげさまで、心も洗われて帰りの道中はとても清々しい気持ちを感じながら部活動の現場に直行しました。貴重な体験をありがとうございました。

『第26回便教会総会をお手伝いして』

おやべ掃除に学ぶ会
代表　福塚　俊之

高野先生から今年の1月に第26回便教会総会を富山県高岡市の「国宝瑞龍寺」での開催を依頼されました。「おやべ掃除に学ぶ会」は、平成12年3月の発足以来、毎月1回地元の公共トイレの掃除を実践し、今年の6月で277回を数えましたが、全国大会の開催経験がなく、大変な事になったと思いました。しかし、愛知便教会及び日本を美しくする会北陸ブロックの皆様方のご指導をいただいて、何とか無事に着地することができました。

その中で、意義があったことは、北陸の先生方を含めて12名の学校の先生方が参加され、交流を深めることができたことです。特に、掃除実施後に行った、6班に分かれてのグループ討議及び発表、さらに神谷孟瑠さん及び場谷翔汰さんによる学校での掃除実践の発表は、参加された方の絆を一層深めることとなりました。

また、私たち「おやべ掃除に学ぶ会の」のメンバーも準備・企画・後片付けを通じて、多くの気づきを得ることができました。今後の活動の大きな学びの種をいただいたと思います。と同時に「トイレ掃除」の実践をされている教師の皆様との交流を通じて、教育現場での掃除実践の輪が広まるよう、私たちもお手伝いをさせていただきたいと思いました。

最後に「便教会総会」が早期に全国持ち回りで、開催されることが叶うよう、お祈り申し上げます。